

報 告

コレクションを有する美術館の利活用と  
生涯学習に資する可能性について  
－徳島大学 大学開放実践センター公開講座の取り組みをもとに－

吉 原 美恵子\*

On the possibility of contributing to lifelong learning with the utilization of the museum  
with collections -In the case of CUE, Tokushima University

Mieko YOSHIHARA

概 要

地元の美術館が有するコレクションをうまく活かしたレクチャーを通じて、学習者は美術作品を見ることが増え、より深い内容理解が期待できる。実際に、展覧中の作品を話題に講義をする、学習者は機会を見つけて美術館に足を運び、講義内容を踏まえた鑑賞が可能になる。この点で何よりも好都合なのは、同時代の美術（いわゆる「現代美術」）であろう。コレクション・ピースを有する美術館では、作品を所蔵している作家の「今」について、学芸員が調査・研究を続けている。展覧会に至る手前の、作品に関わる作家の新しい情報なども講義の中で提供し、考察することはできるわけで、それが実に所蔵している作品の理解を深めることにもなり、同時代の表現をさらに身近に感じてもらう一助にもなっている。「同時代の美術」を中心に据えて、美術の今を知り、いかに愉しむか、という目当てにより、地元にある文化施設を利活用することへと誘う近年の取り組みについて報告する。

1. はじめに－大学開放による生涯学習の場にて

筆者は、徳島大学開放実践センターにおいて、ここ数年間、現代美術をテーマとしたレクチャーの機会を得てきた。美術館の現場にいるスタッフとして観れば、「アウトリーチ」事業だが、「生涯教育」ではなく「生涯学習」を唱える場であるだけに、受講者の学びの積極性にはいつも、美術館で開催する講座に感じる以上の熱を感じている。一年のスケジュールの中で、ほんの4、5コマの講義であるため、受講者の中から、美術の歴史を概観できるようなシリーズをというリクエストの声もあるが、

---

\* 徳島県立近代美術館

コレクションを軸にして、身近でリアリティに富む、同時代の美術を主に紹介しながら、鑑賞の愉しみを味わってもらえる内容にするように努めてきた。

美術の読み方、味わい方を知ると、人生経験の豊富な人たちは、その読み解き方や味わい方を別の場面でも柔軟に応用できることが多い。とりわけ、同時代の美術作品について紹介すると、作品の背景である同時代の社会についてよく知る受講者は興味を持ち、積極的に質問なども投げかけてくれる。質問の内容から推し量るに、よく作品について読み込んでいると感じることは多い。

さまざまな美術表現の傾向や作家、作品などについて紹介するが、近代美術館に作品が所蔵されている作家や作品については、制作歴、その後の展開についてなど、必ず内容に加えることにしている。それは、何よりも県立美術館の所蔵作品は自らがコレクターであるからで、作品を実際に美術館の展示室で観覧する機会もあるだろうからである。実際に「皆さんは、現にピカソ作品のコレクターですよ」と言うと、そんなふう考えたことがなかったという人がほとんどである。しかし、県民一人一人は、紛うことなく各自が県立の美術館に所蔵されている作品のコレクターであり、自分のコレクションとして作品を観るならば、知ることの喜びは増し、学びの意欲が高まらないわけではない。

## 2. 美術館誕生とコレクションの保有

1990年11月3日、徳島県文化の森総合公園に、徳島県下で最初的美術館である徳島県立近代美術館が開館して、今年で29年目の年を迎えようとしている。それまで美術展を観覧するには、県外に足を運ばなくてはならなかった多くの県内美術愛好家たちは、「我がコレクション」を有することになったのであるから、まずは、望ましいことには違いなかった。コレクションを持つ美術館を有するということは、ただ、価値ある美の殿堂として結界を張り巡らせ、遠くから拝観するだけではなくて、非日常の空間や収められている素晴らしいコレクションが息づいているのを人々が間近に味わうことにより、その人生をより豊かなものにすることができるということだ。美術館はそのための場であり、展覧会はそのような機会であると考えべきだろう。美術館は、動き始めた時点から、つねに、人々にいかに活用されるべきかを考えなくてはならなかった。

他方で、美術品を保有するということは、その保管のためのセキュリティや環境の維持管理に思いの外重くのしかかるランニング・コストを抱えるということに他ならない。絵画や彫刻、日本画、版画など、コレクションは確かに「モノ」たちではあるけれど、まさに生き物である。異なる素材による作品群が集められた収蔵庫や展示室は、コレクションを有する美術館の心臓部であり、定期清掃はもちろん、温湿度の管理ほか、様々な設備や機器の定期的な点検も欠かせない。作品はものを言わぬけれど環境の変化には敏感で、それらの美術品としての先の長い寿命を考えると、望ましくない環境下に置かれることによる悪影響の結果は、すぐに目に見えるとは限らず、かなり時間をかけてから出現することもあるので、気が抜けない。

とはいえ、コレクションを有しているというのはよいことである。まず、所蔵作品による展覧会であるため、優品については頻回の観覧が可能になる。コレクション展の開催期間は、3ヶ月から4ヶ

月であるから、途中で展示替えの必要な日本画や水彩画、版画などはともかく、油彩画や彫刻作品については、会期中、幾度も足を運んで観覧することができる。とりわけコレクションの核となるような作品については、継続して展覧し、来館者が「観る経験」を積み上げてきたことが作品鑑賞を深め、熟成させてくれる事例が少なくない。

### 3. コレクションであるピカソ作品の受容

かつて、徳島に初めて生まれた近代美術館の開館直後には、看板であるピカソの油彩作品を観て「お化けのようだ」と発言した人がかなりいたと聞く。収集の趣旨として掲げられた大きなテーマは三つあるが、その中で最も徳島に設立される美術館を高い意識を以て準備された美術館であらしめるテーマは「20世紀の人間表現」であった。人間を主たる表現の対象とした著名な美術家は数多いけれど、ピカソもその中の重要人物である。徳島県立近代美術館には、開館時にピカソの油彩作品がコレクションの核として2点収蔵されていた。

1932年作の〈赤い枕で眠る女〉と1937年作の〈ドラ・マールの肖像〉だが、とりわけ〈ドラ・マールの肖像〉は、徳島県のコレクションを代表する優品として露出度が最も高く、「近代美術館の広報部長」などと呼んだこともあったほど、徳島県が誇る「この一点」である。美術館は、そのグラント・オープン以降、ピカソの作品を常に所蔵作品展に出品し続けた。開館当時は、徳島ゆかりの作家である伊原宇三郎が描いた堂々とした裸婦の像にさえ、来場した男性の団体客からの好奇の目や失笑が浴びせられていたという状況の下、ピカソが取り組んだキュビズム（立体主義）とは如何なるものかを知ることができるタブローも、どこにこの絵の意義や値打ちがあるのかなど頓着することもなく、お化けのような女の描かれた、子どもでも描けそうな絵だという認識が大勢を占めていた。しかし、辛抱強く壁に掛け続けるものである。ずいぶんと長い時間がかかったが、このピカソのタブローに頻繁に会いに来る来館者の姿や声を、近年は実際に目にし、耳にするようになった。

来館したある男性は、自分は日々心がすり減ってしまうような仕事をしているので、折に触れ、ピカソの描いたドラ・マールに会いに来るのだと言った。そして、いつも絵の前で静かに彼女と対面して、心を通わせ、穏やかな気持ちになって会場を後にするというのである。コレクションを自分のものとして大切に思い、近しいものと感じ、自分の人生とうまく関わらせている様子は疑いのないことであった。

わざわざ高い旅費とたいそうな時間を使って出かけなくとも、「我がコレクション」はいたって近いところで観ることができる。もちろん、徳島県の美術館についてはとりわけ、県西部や県南部の県民にはいささか遠い立地であることは認識している。そして、海外旅行でルブル美術館を訪れたことがある人でも、徳島県立近代美術館に足を運んだことのない人が未だに多くいることも承知している。先にも、美術館のアウトリーチ事業でシルバー大学の講師として県南部を訪れた際に、そのような話を直に耳にした。このような事実は想像に難くないけれど、せっかくの身近なコレクションであるのだから、コレクターの一人として、機会があれば積極的にコレクションに会いに出

向こうという気になってもらえないか、目下、美術館や美術館が有するコレクションの魅力をいか  
に知ってもらえるかを模索しながら、発信しているところである。そういうわけで、美術館のアウト  
リーチ事業として位置づけられている、シルバー大学の講義のテーマは、「近代美術館の魅力」だっ  
た。時間的にもゆとりのある世代による美術館の活用、つまり所蔵作品の観覧は、双方にとって望  
ましい。

#### 4. 同時代の美術を豊かに味わう

そんななかで、とりわけ私がコレクションの魅力を感じてもらいやすい作品群として考えている  
のが、「現代美術」や「現代アート」と呼ばれる、同時代の美術家による一群れの作品である。よ  
く言われるが、「現代美術」は決して「イマドキの若者のための美術」ではなく、主に若者が志向  
するような内容の表象であると言い切れるものではない。むしろ、長い時間をかけた生活の中で蓄  
積された経験や知見を有する人たちの、様々な視点からの解釈を受け容れる間口の広さや懐の深さ  
に思いを至らせるなら、人間として成熟すればするほど、現代の美術表現を楽しめると考えてよい  
だろう。

作家たちは、これまでの美術表現を踏まえ、技術を受け継ぎながら創り、美術の歴史の「今」を  
編んでいる人たちである。年代層という観点からだけで、いろいろなことを断じることはできない  
けれど、熟年層は新しい表現に対峙したとき、まずは謙虚過ぎるほど謙虚に、これまでに見たこと  
も聞いたこともないものは、自分には到底わからないものだと決めつけて、目の前に見えない衝立  
のようなものを自ら置く傾向がある。反対に、若者たちは、その若さゆえに、自分の乏しい経験や  
知識の量を弁えてはいるが、作品に屈託なく近づこうとすることが多い。そのせいか、現代美術は、  
若い鑑賞者のためのものだと考えられがちだ。

しかし、現代美術作品が求める鑑賞者は、おそらく、個人のこれまでの知識、経験、歩みの全て  
を総動員して、怯むことなく表現にアプローチしようとする人たちであろうから、経験が多いほど、  
鑑賞に深みや味わいが増すのは言わずと知れたことである。

以下は、美術館の活動をふまえて展開してきた徳島大学 大学開放実践センターでの講義内容に  
ついての概略の報告である。美術館人が関わることによって、美術館やコレクションと受講者を繋  
ぎ、コレクションを意識した内容により、知識を充実し、関心を深めてもらいたいという試みを続  
けてきたことを記すものであり、少なからず、同時代の美術作品への理解を深め、興味を持つ人た  
ちを育ててきたのではないかと考えている。

#### 5. 徳島大学 大学開放実践センター講座での取り組み

##### (1) 2012年—たくさん観るトレーニング

美術の話題は「感性の問題だから、よくわからない」という人も多いが、私たちが生きている時  
代に生み出された表現には、社会の出来事や経験などが反映されているため、学びも大切だ。本来

は親しいはずの美術が敬遠されがちなのは、その鑑賞のトレーニングの機会が少ないからかもしれないと思い、この年度は、美術の歴史をふまえ、具体的な事例をもとに、現代美術を愉しみ、親しむ水先案内を心がけた。

美術作品といえば絵画や彫刻と言われ続けてきたが、近年では、平面作品と立体作品という場合が多い。それらの表現の特徴を知ることからはじめ、いずれにせよ、作品は鑑賞する側の知識、知覚、経験を駆使してよく考え、見ることを期しているということを伝えた。私たちが世の中を知るために、視覚、聴覚、触覚ときに嗅覚や味覚を駆使するように、作品について理解するために、あらゆる感覚の動員が求められる。作品を理解するためには、その背景にある社会を知ることが有効であり、作品はそれを生み出した社会と繋がっている。それゆえ、同時代の作品を鑑賞することは自分の生きる社会を想うことにもなり、もっとも私たちにはアプローチしやすいのではないか。作品を写真や映像で紹介しながら、自分たちもよく知る社会から生み出された表現内容を丁寧にあぶり出すことに注力した。

近代美術館が作品を所蔵している石内都、福岡道雄、松谷武判、アントニー・ゴームリー、アルフレッド・ジャーなどの作品に即した読み解きや、特別展を通じて紹介した作家、森口ゆたか、三嶺伊紗の仕事を紹介するにあたっては、作家についての新しい情報や豊富な資料が提供できる好機であったし、時には現実のやりとりを通して得られた作家の本音や素顔の魅力などを知らせることのできる意義ある時間であった。

## (2) 2013年—作品が生まれた背景を知る

美術館は、作品を実際に扱いながら、作品や作家について調査を続けており、展覧会開催や作品収集以外にも、同時代の作家の動向や作品のありようなど、たくさんの情報を収集している。それらは、作品鑑賞に際して、大変有益である。作品鑑賞のコツをつかんで、美術館や画廊で作品と対話することを喜べるようになってもらいたいと企図したこの年は、より積極的な作品との関わりを持ってもらえるような内容を志し、美術館でのバックヤードの仕事についても話題提供を試みた。この年は、「誰もしていないこと」をするのが表現者の制作における無二の姿勢であり、美術館が調査・研究して刻んでゆくべきは、これまでに誰もしていない、優れて新しい仕事であることを説き、美術史は各々の時代の前衛達によって紡がれてきたものであることを示したし、「つくること」や「場」の問題について考えを深めることもした。ちょうど、所蔵作家の福岡道雄が「つくらない彫刻家」としての日々を過ごしている時期であったため、やりとりしていた書簡の内容を紹介し、その制作スタイルの独自性についての理解を促した。他に、美術の周辺の表現領域についても、互いに刺激を与え合いながら展開してきたことについての事例を紹介した。具体美術協会の活動の事例も挙げたが、徳島の美術館では、具体美術協会の吉原治良、元永定正、白髪一雄や発足当時には若手だった松谷武判などの作品を所蔵しているため、作品や作家の活動を紹介しつつ、所蔵作品にも親しんでもらえるように努めた。



また、時代背景についても、じっくりと考察した。20世紀は新素材の誕生が相次ぎ、この短い期間で、人がこれまでに見たこともないような材料が飛躍的に増えた。また、大きな戦争を経て、技術が飛躍的に発展し、経済発展も相まって、表現の世界にも多様な可能性が生まれた。そのことにより、美術は物質的な面でその恩恵を受けつつも、複雑な問題を孕むことにもなる。新しい材料や技術が、表現の幅を広げた場面もあるし、科学の発展の恩恵は観る者にも大きな変化を与えた。目に見えないミクロの世界から、宇宙の果てまで、私たちの日常に科学の最新情報が簡単に取り込まれることで、意識が大きく変わったといえるだろう。思えば、激動の時代を生きて、知らぬうちに意識の変革をも経験していることに気づかされるのも、ひょっとしたら、作品を通じてかもしれない。そのことを伝えと、美術は日常のすぐ側にあるものだという気づきも生まれよう。

さらにこの年には、展覧会の企画から、開幕に至るまでの流れを、実際に美術館で開催された現代美術展の例を挙げながら、追体験とまではいかなくとも、裏方仕事を垣間見ることができるような時間も設けた。2007年にベルリン在住の現代作家ハンス・ペーター・クーンの個展を美術館で開催した折の作家とのやりとりや材料の手配についての工夫や困難、窮したときに思いつくアイデアなど、企画を立ててから展覧会を実現するまでにしなければならないことが大まかにでも理解できると、展覧会を観る時の肝も見えてこようというものである。印刷物についても、刷り物に込められた情報や意味をデザイナーとの打ち合わせを通じて、どのように盛り込むのか、観る側としては、盛り込まれた情報をどのように読み取り、解くのか、気づく点が多々あったことだろう。

後日、ドイツの南西部にあるカールスルーエ市にあるZKM（カールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター）から徳島に来たマネジャーが、偶然にも美術館ロビーでハンス・ペーター・クーン展の図録を手にとって驚いていたのだが、よもや極東の国の地方都市で、ドイツを代表する現代美術家の一人であるハンス・ペーター・クーンの未だ観ぬ仕事に出会うとは思わなかったようであった。美術館が活発に活動していることで、ベルリンほか、ヨーロッパの都市にわざわざ出向かなくても、当代一流のヨーロッパの美術家たちの仕事を近くで、何度でも観ることができた、良き時代もあったことに言及した。

### (3) 2014年—知識や経験を総動員する美術鑑賞

新聞紙上に毎日新しい出来事が報じられるように、現代の美術表現の世界も日々新しい作品が発表され、停滞していることはない。内外で発表された新しい作品や展覧会などを紹介しながら、現代美術が私たちのこれまでの知見と結びつき、自分の中で何かが目覚めたり、経験が作品鑑賞と生き生きと結びついたりすることを実感してもらうよう努めた。

この年は、「三嶽伊紗のしごと—みているもののむこう」展が春の特別展として開催された年だった。よって、2014年春に県立近代美術館で開催される特別展に足を運んでおくことを受講者へのメッセージとして予め伝えることができたため、座学と実見がうまくかみ合う講義ができた幸運な年でもあった。

三嶽伊紗は、隣県の高知市の生まれで、自然豊かな琵琶湖を見渡せる滋賀県大津市に在住し、活躍中の現代作家。自然と親しむ中で、身の回りに起こる不思議な事象をつかまえ、科学的根拠を踏まえた上で、美術表現によって自然の摂理などについて見る人にわかりやすく知らせようと試みる作品を生み出してきた。「科学と美術と文学と」という紹介をしたのだが、きわめて知的に構成されるその作品は、自然哲学にも関わってゆく味わい深いものであるだけでなく、ロマン主義的な美しさもたたえていた。アメリカの哲学者、ヘンリー＝デイヴッド・ソローにも言及し、美術が深く哲学に根ざしていることも示唆することができた。

この年はまた、前年に調査に向かっていた「現代美術のオリンピックー ヴェネツィア・ビエンナーレ 2013」についても収集してきた資料や映像をもとに、国際的な現代美術展のあり方や意義について、話題を提供することもできた。美術館でさえ、レクチャーの機会がなかなかない、現代に連綿と続くこの華やかな国際展は、美術がどのように広く認められ、美術史がどのように編まれてゆくののか、ということを理解しやすくしてくれる重要な事例の一つである。

立体作品の紹介が多く時間を占めたので、最後の時間には、当代を代表するペインター（絵描き）を紹介せねばなるまい、と意気込んで、当時、注目していた金田実生の作品について紹介した。この作家の作品については、この後、2017、18 年度に県立近代美術館が作品を1点ずつ購入する運びとなった。何年もかけて地道に調査し、同時代の優れたペインターとして紹介した作家の作品が、やがて受講者のコレクションに加わるという、これ以上望ましいことはない結果も招き寄せた。

#### (4) 2015 年ー美術の歴史に連なっている現代の表現

それまで現代美術についての講座を設けてきたが、この年度は、ルネサンス期以降の美術の歴史について概観し、現代の表現へと結びつけるダイナミックな展開を試みた。それは、この年の春に県立近代美術館で、およそ 300 年にわたる西洋美術の作品を扱う特別展を開催する予定となっており、これを期に、時代が表現を生み出すということを実感しながら学ぶことを企図した。加えて、作品鑑賞は現代人としての目からしか、なし得ないことも意識させた。

講義で話題にする作品を地元の美術館で実見することがかなうタイミングで、これまであまり触れてこなかったルネサンス以降の西洋美術史の大きな流れについて見渡すことや美術の歴史について知識を持つことを礎に、それに連なる「現在」を生き、創っている作家たちの仕事に繋げた。それぞれの時代を代表する作品を通して、当時の時代背景について知り、その時代ゆえに作家が持つに至った理念や表現の方法について理解することを期して、ルネサンスから現代までを一筋の糸で貫くように努めた。

#### (5) 2016 年ー社会に生きるアーティストたち

美術作品が生まれるのも親しまれるのも、人間が生きる社会があつてのものであり、作品理解を深める「社会」について意識しながら、作品に向き合い、主題を探る愉しみに目を向けさせるよう

企図した。具体的には、所蔵作品を介したやりとりがある同時代の作家たちの素顔や美術館の役割などを学芸員の目から紹介することに重きを置いた、

初回は、「ユン・ソクナムとマイノリティー ジェンダーを超えて」と題して、隣国の現代美術家で、日本でもこれまでに多くの作品が紹介されてきたユン・ソクナムの仕事を紹介した。2回目は「パリが育てた松谷武判ー テロリズムに抗う」として、半世紀以上にわたりパリに住まい、作家活動が続けてきた松谷武判の仕事と、松谷が説く芸術の持つ力について考えた。3回目は、アルフレッド・ジャーの美術家として世界を飛び回って取材した仕事とジャーナリズムの仕事を比較した。表現の方法について熟慮することで、社会に於ける美術表現の役割を見つめるように促した。

3人とも、活躍中の美術館の収蔵作家であり、これまでもしばしば講義の中で作品を紹介してきた作家たちでもあった。学芸員を通して生の声を聞くことができるし、継続的な調査による新しい知見は、コレクションしている作品の見方を確実に深化させてゆく。そのことを感じたのは、学習者からの質問が講義後に相次いだ時だった。最後に、「移ろう『今』を刻む」ということに注目し、美術館の「時代を記録する」仕事と、来館者の「記憶に残る展覧」という仕事について説いた。

#### (6) 2017年ー美術館の役割

美術館に収集・保存されている資料からは、調査・研究を通じて、様々な情報を引き出すことができる。そのことを踏まえ、テーマやストーリーにしたがい、美術資料(=作品)を陳列し、人々の目に触れさせるのが展覧会である。美術作品の鑑賞者としてだけでなく、美術館や企画者の目から展覧会や作品を観ることも美術への興味を深めるだろうと思い、美術館(学芸員)の仕事についても積極的な理解を求めた。「美術の歴史がわかる」とか「作品について知る」ということに加え、美術館という施設を存分に愉しめるように、展覧会を観て、そのバックヤードについて思いを馳せられるような、ちょっとこれまでとは違うアプローチをした。もちろん、美術の基礎的な知識を身につけ、新しい表現をこれまでの自分が持つ知識や経験を以て理解することも目指しながら、美術館の役割を知り、美術館を自在に活用できるようになることを目的にした。実際に、多大な予算と労力を掛けて美術作品を保持しているのに、地元の美術館が活用されないのはもったいないことである。美術館に赴き、作品を通じて美術を暮らしの身近なところと感じ、生涯学習の内容の深まりや展開に役立ててほしいと切望する。

この年は「美術館のしごと」と「美術館を愉しむ」と題し、美術館の仕事としては、美術作品の紹介を通して、今を生きている人たちに伝えたいことをよき媒体となって伝えること、コレクションを活かしながら、地域のみならず、より多くの鑑賞者のために展覧されるように作品の保全と活用を考えること、美術館外にあるパブリックな作品についても思いを至らせること、を伝え、美術館を愉しむために、展覧会の目当てや多様なテーマについてだけではなく、例として、ルイス・カーン、安藤忠雄、レンゾ・ピアノによる米国フォートワースにある一群の美術館建築にも言及した。様々な視点で、美術および美術館の建物に見所があることを伝えたかったのだが、建築物としての各々



の評価だけでなく、美術館人としての展示室の作り方や光の具合など、作品を見せるための建築家の工夫のあれこれや、それ自体の美術的な魅力について触れると、受講者の反応から大変興味がもたれたように感じられた。海外旅行の観光地の一つとして、美術館を訪ねる人も多い時代であるからだろう。

#### (7) 2018年－時代の変化を刻む美術館

多くの事例や作品を紹介しながら、欧米に軸足を置いた近・現代の美術史の流れを概観し、世界の美術史に与する日本の美術の動きについて考察する年度にした。新しい表現は常に、その時代の同時代（＝現代）美術であり、前衛美術表現であるはずで、いかなる表現も、その時代の社会のありようをあぶりだすものである。もちろん美術市場にも与している。美術史の流れづくりに大きく関与する美術館の、期待される役割についての考察も促しながら、20世紀の美術史をながめ、作品理解のためのポイントを探り、時代によって求められる美術館の姿について考えることを促した。

エコール・ド・パリの時代と戦後アメリカの文化土壌を歴史的に見つめ、20世紀の技術の進歩とともに豊かになった素材と美術表現について学び、美術史に刻まれた日本の現代美術の前衛集団であった具体美術協会について要点を押さえた後、現代社会における美術館の役割について語った。フェリックス・ゴンザレス＝トレスの美しくコンセプチュアルな作品や田中敦子の古びないインスタレーション作品、街に繰り出すローレンス・ウィナーの語りかけなどを写真により紹介し、親しんだ。新しい表現について積極的に紹介してゆくことの大切を説き、時代の変化に応じて、変化を求められる器としての美術館の役割についても、いくらかは認識されたのではないかと感じている。

## 6. おわりに

美術館が有するコレクションを軸に、鑑賞者は、作品が生み出された時代背景を学び、それぞれの美術表現のあり方や作品の示唆する豊かな内容を味わう。地元美術館のコレクションであるから、展覧の機会を得れば、何度か展覧会に足を運び、作品に親しむ機会は増える。とりわけ、作品が収蔵されている現代作家には、未だ現役の作家も数多くいて、生の声を伝えることもできれば、作家としての生きざまの「今」を伝えることもできる。

例えば、この数年間で、松谷武判の制作については、幾度も紹介してきた。具体美術協会のメンバーだった松谷は、パリに渡って半世紀以上を絵描きとして過ごし、パリに鍛えられた作家として紹介してきたが、彼の制作や作家としての姿勢からは、作品理解にとどまらぬ、深い人生の滋味をも味わってくれる人が多数いた。70代半ばまで、制作しては発表し、作品を売却して、つましく暮らしてきた作家が、グッゲンハイム美術館での具体美術協会のグループ展の開催を機に、国際舞台に大きく採り上げられ、世界中から個展開催のオファーが舞い込むようになっただけでなく、2017年にはヴェネツィア・ビエンナーレに招待出品の運びとなった。来る2019年6月には、82歳になる松谷がポンピドゥー・センターにて個展を開催することにもなった。80歳を超えてなお、上り

詰めようとする作家の創作への執念や人生について振り返って考えていることなどを筆者との対話や書簡のやりとりなどから抜粋して、折に触れては紹介してきた。松谷武判の清々しささえ感じる美術への執着は、学習者達の気持ちや意欲を引きつけるばかりか、人生を生きる先達として、その作品に敬意と憧憬のまなざしを注がせてきたようにも思われる。

徳島県立近代美術館は、入館者の多くを熟年者が占める美術館であり、現代の美術表現への理解や納得から、美術を味わう楽しさに気づく層の主たる構成年代は熟年層であると考えれば、この二者が同時代の美術表現を介して結びつくことで、互いに大きな益を得ることになるのではないか。社会や歴史に向けるまなざしは、この惑星の上で生きた時間が長いだけ、その中で積み上げられた経験が多いだけ、磨き上げられ、生きている時代の表現をよく観るだろう。生涯学習の一番の強みもその点にあると考えられる。同時代の人々のために制作し、発表された私たちの時代の作品を紹介し続ける美術館を生涯学習の現場で受講者が積極的に活用することは、自ずと双方を活性化することに繋がるという手応えをこれまでのところ感じている。

## Abstract

With giving a lecture that incorporates the collections of local museums, learners can have more opportunities to face artworks in the museum and enjoy appreciation based on the lectures. Contemporary art works will be good teaching and learning materials. Especially the contemporary collection pieces as learner's collection is beneficial for mature people.